

テンボ
「象は鼻が長い」構文の提題性をめぐって
——スワヒリ語の総主論ノート

小 馬 徹

これは、スワヒリ語の「総主論」、或いは「提題論」成立の可能性をめぐるノートである。

私は、拙稿“^{テンボ}「象の鼻は長い」か？——スワヒリ語の「総主論」序説”⁽¹⁾で、日本語学で長い間論議されてきた「象は鼻が長い」に比較し得る構文がスワヒリ語にもあることを守野庸雄が指摘していること、更に、この指摘によって、従来のスワヒリ語研究で見落されてきた、スワヒリ語にはば一貫するいわゆる「一致」から逸脱する言語現象を研究する端緒が開ける可能性があることを論じた。

I

まず、その^{テンボ}「象構文」の例を一、二挙げてみよう⁽²⁾。

1) Thembo mkonga Wake (ni) mrefu.

象 鼻 の (が) 長い

(象は鼻が長い。)

41) Neno hili asili yake inatokana na kiarabu

単語 この 起源 の 出ている アラビア語

(この単語はアラビア語に由来する。)

これらの文の述部、(ni)mrefu (が長い)/inatokana na kiarabu (アラビア語から出ている)は、統語上、tembo (象)/nen hili (この単語)ではな

く、mkonga(鼻)/asili yake(その起源)と一致している。そこで、tembo, neno hili などの文頭の要素は、スワヒリ語の統語法にほぼ一貫すると考えられている原理である一致関係から遊離しており、すぐ後に続く文全体に対して、日本語学でいういわゆる「総主」として機能していると、一応考えることができるのである。

先の拙稿では、このような文要素の配置構成をもつと考え得る文例をできるだけ沢山集め、それらを相互に検討して、今後の研究についての幾つかの視点を示すに留めた。

私は今、この小論で、それらの諸点を踏まえながら、果してスワヒリ語の「総主論」が構想し得るかどうか、再吟味を試みたい。

II

先述の拙稿の中で私が挙げた例文の中に、実は、文頭の要素が果して「総主」でありそれが「提題性」をもっているかどうか、疑問を抱かせるものがあったことを率直に認めなければならない。

例えば、"48) Mimi mke wangu hapati nusu ya unayoyapata wewe." などがそれである。これは、或る小説の中で、主人公が自分のオメカケサンに言う言葉である。私は、仮りに、「私についてなら、妻はお前の半分も得ちゃいないよ。」と訳文を添えておいた。だが、この「私についてなら」或いは「私については」という部分が、文脈からしても必ずしもしっくりせず、そのようなニュアンスが殆んどないと解してよいと思える。

そこで私は、本来ならいわゆる所有形容詞 -angu ([私] の) の後に挿入される mimi (私) が、——必ずしも提題のためではなく——文全体のリズムを整えるためか、或いは他の何らかの理由で文頭へ回された可能性を考えてみたのである。これを図示してみよう。


Mimi mke wangu (mimi) hapati nusu ya unayoyapata.

ここで、-angu/-ako/-ake/-etu/-enu/-ao などの「所有形容詞」に

ついて少し考察しておかなければならないだろう。

D. V. パロットは、これらの夫々に、my/your/his, her, its/our/your their をあて、更に、所有代名詞として、そのまま、mine/yours/his, hers, its/ours/your theirs にもなり得ることを示している⁽³⁾。他方 E. O. アシュトン⁽⁴⁾は、これらを「代名詞的語根」とする。これらが英米の文法家の一般的な扱い方であると言える。

守野は、これらが形容詞的な文要素であるとする立場から、ここでも興味深い独自の見解を示している。彼は、次の様な表を掲げて反論する⁽⁵⁾。

- | | | | | | |
|----------|-----------|---|----------------|---------------|----------|
| 1. (僕) | <u>乃</u> | 本 | kitab <u>u</u> | <u>changu</u> | (mimi) |
| 2. (君) | <u>の</u> | 本 | kitab <u>u</u> | <u>chako</u> | (wewe) |
| 3. (彼) | <u>ノ</u> | 本 | kitab <u>u</u> | <u>chake</u> | (yeye) |
| 1'. (僕ら) | <u>No</u> | 本 | vitab <u>u</u> | <u>vyetu</u> | (sisi) |
| 2'. (君ら) | <u>no</u> | 本 | vitab <u>u</u> | <u>vyenu</u> | (nyinyi) |
| 3'. (彼ら) | <u>no</u> | 本 | vitab <u>u</u> | <u>vyao</u> | (wao) |

守野の主張するところは、-angu/-ako 等は、形態が人称と数によって変化するが、これらは、いわば日本語の格助詞「の」に譬えられるような文要素であって、その機能もまた、日本語の格助詞「の」が——筆記上——「乃」、「之」、「ノ」、「no」、「No」、「no」等に変化しても意味上一定であることに譬えられるということである。それが、「僕の」(my), 「君の」(your) 等であり得るのは、呼応する人称代名詞、mimi, wewe 等と連動して、-angu mimi, -ako wewe 等となって初めてであると、守野は考えている。

実際、海岸スワヒリ語では、守野の言うように、-angu 等の所有形容詞と mimi 等の人称代名詞とが連動されて用いられることが、一般的であるとまでは言えないにしても、少なくとも多いのである。

ところで、F. ジョンソンは、-angu 等を「所有代名詞の不変化部分」と考え、その指示するものを強調したり正確にするために、人称代名詞や再起代名詞が添えられると考えて、次の例を挙げている⁽⁶⁾。

- { kiti chake, his chair
- { kiti chake mwenyewe, his own chair
- { kiti chake yeye mwenyewe, his very own chair

ところで、F. ジョンソンは、kiti chake yeye (his very chair) の形を示していないが、-ako と -ake に対する彼の説明からみて、その存在を少なくとも否定していないのは自明である。

F. ジョンソンは、-angu 等「所有代名詞の不変化部分」と人称代名詞の連動について言及するが、それを飽くまでも付随的現象であると考える点で、本質的現象であるとする守野とは立場を異にしている。

-angu 等の所有形容詞を考える際に、-a という所有形容詞を併せて考えなければならない。両者の関係については、E. O. アシュトンの分析が注目に値する。彼女は、-angu, -ako 等を、夫々、-a-ngu/-a-ko/-a-ke/-etu/-enu/-a-o と見、更に -etu/-enu の形は、夫々、-a-itu/-a-inu の縮約に基づくと考えている⁽⁷⁾。即ち、-angu, -ako 等は、全て、-a と他の代名詞語根が結合して出来たと見ている訳である。

この E. O. アシュトンの見解は、全ての所有形容詞が所有形容詞 -a を基底にもつこと、更にそれらが名詞を修飾する場合には -a に、人称代名詞を修飾する場合には -angu, -ako 等になることを示すと解することができる。共通語としてこの一世紀余りの間に普及した内陸スワヒリ語では、必ずしもこの両者の使い分けが明確でなく、例えば「私と彼の間で」は "baina ya mimi na yeye" となるが、母語として用いられる海岸スワヒリ語では、常に "baina yangu (mimi) na yeye" である。

中島久は、はっきりと、"-a+名詞", "-angu, -ako etc.+人称代名詞" を本来的な用法と規定し、例えば次の例によって、両者の違いを説明する⁽⁸⁾。

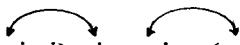
- { badhili yake (yeye) 彼の代りに
- { badhili ya yeye

i) 彼という「人間」の代りに(人形という「物」を etc.)

ii) ^{■イエイエ} 彼(という語)の代りに

但し、中島によれば、“-angu. -ako ete. +人称代名詞”に於て、人称代名詞は往々省略され得るのである。

スワヒリ語に於ては、文中に主辞(主格接頭辞)や目的辞(目的格接辞)が存在することによって、人称代名詞がそれと推定し得る場合に省略され得るのは、よく知られている。例えば、



 Katika picha hii, (mimi) nimemjua (yeye) sura yake barabara.

 (私はこの写真で彼の顔がよく判った。)

のようになる。

これらのことを念頭におくならば、普通は単に慣用として済まされている “Jina lako (ni) nini ? (直訳：あなたの名前は何 ?)” が何故間違いで、 “Jina lako (ni) nani ? (直訳：あなたの名前は誰 ?)” でなければならないかを説明することができる。即ち、本来は、 “Jina lako wewe (ni) nani ?” であったのが、 wewe という人称代名詞が省略されたため “Jina lako nani ?” の形になったのであって、 nani (誰) という疑問代名詞は jina (名前) とではなく、直前にある(答の) wewe (あなた) と呼応していると考えられるのである。

III

ところで、“Jina lako nani ?” の答としては、“22) Mimi jina langu (ni) Ali. (私の名はアリです。)” の他に “22') Jina langu mimi (ni) Ali. (私の名はアリです。)” という形がある。このいずれもの文形が、総主と主語の大小関係に係わりなく、「^{アンゴ}象構文」と考えることができる⁽⁹⁾。では、この構文に「提題性」があるとする立場、或いは前提から、両者の間に次のような表現性又はニュアンスの差違があると考えてよいのであろうか。

- { 22) Mini jina langu (ni) Ali.
 (私は、名前をアリという。)
 { 22') Jina lagu mimi (ni) Ali.
 (名は、[私は] アリです。)

私には、俄かに決し難いが、必ずしも上のような差違を見付け出せるようには思えない。

そこで、この場合にもまた、22) は、22') の jina langu mimi という「(代) 名詞+所有形容詞+人称代名詞」の連動形が文頭に来て、そのうちの人称代名詞 mimi が頭置されたものである可能性が考えられるのではあるまいか。


 Mimi jina langu (mimi) (ni) Ali.

更に、上の二文形に近似し、一見「^{テンボ}象構文」の形をしながら、動詞が主語の位置ではなく、総主の位置、即ち文頭にある語と一致している例があった⁽¹⁰⁾。


 42) Mimi jina langu naitwa Ali.
 

従って、この文例は、文頭に来る要素がいわゆる「総主」であり、それに続く要素が主語であるとする仮説の重要な反例になり得るかも知れない。では、何故、動詞 itwa (呼ばれる) が jina (名前) の主辞 li ではなく、mimi (私) の主辞 ni に一致しているのであろうか。これは、これまでに挙げてきた例から、本来所有形容詞 -angu のすぐ後に来るべき人称代名詞 mimi が何らかの理由によって文頭に出たものだと解することができるだろう。


 Mimi jina langu (mimi) naitwa Ali.

こう考えれば、itwa (呼ばれる) は、jina (名前) ではなく、直前にある(答の) mimi (私) に一致していることになって、一致関係を無理なく説明できることになる。

IV

一般には、“-angu, -ako etc. + 人称代名詞”, “-a + 名詞” が本来的用法であることは既に述べた。ところが、例外がある。個人名については、-a の代りに -ake が用いられることがある。例えば、「ハムシイの子供」は、“mtoto wa Hamisi” も “mtoto wake Hamisi” もともに可能である⁽¹¹⁾。又、親族名称の複合形でも、“baba yake mama (母の父)” のように -ake が用いられる。これらの場合には、その固有名詞をもつ者が人間であるという心理が文法に作用しているのである。又、-ake の用法は拡大されて、本来は NN クラス⁽¹²⁾に属する動物にも、更には無生物一般にも広く用いられる場合がある⁽¹³⁾。

そこで、これら -ake の拡大された用法から推して、-ake が名詞と共に用いられた場合にも、人称代名詞と共に用いられる場合に準じて、例えば “asili yake neno hili” のように -ake の直後に名詞を付したこと、加えて、この「(代) 名詞 + -ake + 名詞」の連動形が文頭に用いられると、人称代名詞との連動形の場合と同様に、例えば “Neno hili asili yake……” のように、名詞が頭置されることが考えられないであろうか。

勿論、このような推論を裏付ける実証的な資料を今すぐ示すことはできないのであるが、一考すべき問題であると考ええる。

V

以上から、私の推論を要約して仮説を立ててみよう。

1. i) 所有形容詞が人称代名詞と共に用いられる時に、-angu, -ako, -ake, -etu, -enu, -ao の形を取る。
- ii) この連動形が本来的用法であるが、人称代名詞が省略されることがある。
- iii) この「(代) 名詞 + 所有形容詞 + 人称代名詞」の連動形が文頭に来ると、人称代名詞が頭置される。
2. iv) 名詞についても、本来名詞に連動する所有形容詞の -a ではなく、-ake が用いられる場合がある。(e. g. asili yake neno hili)

- v) この場合にも、「(代) 名詞+所有形容詞+名詞」の連動形が文頭に来ると、名詞が頭置される。(e. g. Neno hili asili yake)
- vi) 以上とは逆に、「(代) 名詞+所有形容詞+名詞」の連動形が文頭に来た場合に、最後の名詞を頭置して、「(代) 名詞+所有形容詞+人称代名詞」の文頭倒置形に準じ得るために、-a ではなく -ake を用いると考え得る可能性がある。

VI

以上の議論は、次のような事実に基いて行なわれたものである。

1. "48) Mimi mke wangu hapati nusu ya unayoyapata." のよう提題性の弱い文例がある。
2. "22) Mimi jina langu (ni) Ali." と "22') Jina langu mimi (ni) Ali." の間にニュアンスの大きな差が見出しにくい。
3. "42) Mimi jina langu naitwa Ali." のように、語の配列は「^{テンボ}象構文」でありながら、一致関係に於て「^{テンボ}象構文」とは異なり、動詞が主語ではなく「総主」に一致する例がある。

その結果として、「(代) 名詞+所有形容詞+人称代名詞」又は「(代) 名詞+所有形容詞+名詞」の連動形が文頭に来た時に人称代名詞又は名詞が頭置され、この結果、「^{テンボ}象構文」が成立すると考えれば、「48), 42), 22')」を含めてこの構文についての統一的理解が可能になるであろうことを示した。

ところで、このように包括的に考えた場合に、この「^{テンボ}象構文」が果して「総主構文」であり提題性をもつかどうかという重大なテーマは、これまでの議論の過程で、トートロジーとして扱われてきたことを率直に認めなければならない。

即ち、私が前提としたのは、上記のような例外的な文例では、「(代) 名詞+所有形容詞+人称代名詞」の連動形が文頭に来たために「何らかの理由から、人称代名詞が頭置されたのではないか」という仮定であった。私は、これまで、それが一体どのような理由によるものか全く論じてこなかったのである。実は、その理由こそが「提題性」の付与である可能性がむしろ最も高いのではあ

るまいか。

この議論に於て、「一致」ではなくむしろ語の配列に焦点をあてるならば、42)の一致上の例外性も「提題性」には影響を与えていないと考ええてよい。又、48)に提題性があるかどうか、22)と22')との間に果してニュアンスの違いがあり、文頭の語に提題性を認め得るかどうかは、今後一層多くの文例を集め、複数の優れたインフォマントの力を借りて検討されるべき課題であり、むしろ即断すべきではないだろう。

それ故、^{テンボ}「象構文」を「総主構文」と考え、その提題性を論じてゆくことは、やはり妥当であり、少なからぬ可能性をもっていると思われる。

(註)

- (1) 小馬倣, 「^{テンボ}“象の鼻は長い”か? —— スワヒリ語の“総主論”序説」, 『一橋研究』, 第4巻, 第3号, 1979年。
- (2) 以下各文例は, 小馬前掲論文による。又, 各文例に付した番号は, 同論文中の整理番号である。
- (3) Perrott, D. V., *Swahili* (Teach Yourself Books), Landon, 1951, p. p. 27—28.
- (4) Ashton, E. O., *Swahili Grammar*, London, 1941, p. 54.
- (5) 守野庸雄, 『スワヒリ語言法』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1969年, 3頁。
- (6) Johnson, F., *A Standard Swahili-English Dictionary*, London, 1939.
- (7) Ashton, op. cit., p. 55.
- (8) 中島氏から直接に御教示を賜わった。
- (9) 小馬, 前掲論文。特に第Ⅳ節(120—122頁)を参照されたい。
- (10) 小馬, 前掲論文, 129頁, 注(9)。
- (11) Ashton, op. cit., p. 56.
- (12) バントウ語の第9, 第10クラスにあたる。
- (13) 但し, 無生物は, それが複数であっても, 常に -ake と一致し, 三人称複数の -ao とは一致しない。例えば,

{	mti na matunda yake	
	(木 (sg.) とその果実)	
{	miti na matunda yake	
	(木 (pl.) とその果実)	

《付 記》

この論稿は、昭和53年東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所公募共同研究員として、同研究所助教授守野庸雄氏と行なった共同研究プロジェクト「スワヒリ語の構文と統語法の研究」の成果の一部をノートに纏めたものである。又、中島久氏には、常日頃から多大の御教示を賜っている。この小さなノートが多少なりともスワヒリ語の研究に資するところがあるとすれば、全て両氏の御指導に負っている。尚本文及び本文中の誤りは一切筆者による。

（筆者の住所：国立市東2-4 院生寮）